

〔書評〕

## 中西健治著 『杜陀日記の研究—近世僧侶の旅日記—』

林 和 利

最初に『杜陀日記』について、簡単に紹介しておく。

作者は称瑞しやうずいという浄土宗の僧侶である。称瑞は江戸後期の文化元年（一八〇四）、丹波国大山（現在の兵庫県篠山市大山下）に生を受けた。二十歳のとき出家し、二十八歳のとき江戸浅草の称往院住職になる。天保十五年（一八四四）の春、帰郷を思い立った称瑞は二月四日に江戸を立ち、三月二十四日、丹波大山に到着した。その旅の記録が『杜陀日記』（以下、『日記』）である。

『杜陀』とは僧侶、つまり称瑞自身のことである。

中西健治著『杜陀日記の研究—近世僧侶の旅日記—』（以下『研究』）は、『日記』の本文すべてを翻刻し、難語や固有名詞に適切な注釈を施すとともに、巻末に詳しい問題を付した研究書である。細やかな配慮のある注釈と、的確な読解を示した問題に、長年培われた著者の深く広い学識がくしきがうかがわれる。

それは随所に見られるが、一つだけ例を挙げておく。「古歌」として『日記』中に記された「夢の世にまほろしの身の生れ来て露に宿かる宵のいなづま」（三八頁）の注釈として、「上句は、雲

隠六帖（別本）の巻頭歌」、「下句は、沙玉和歌集（後崇光院）の歌と「共通する」と指摘し、「称瑞の記憶で一首に合成されたか」と著者は推察している。和歌に関する専門的にして該博な知識がなければ不可能な鋭い洞察である。

また、適宜節を区切り、その部分の記事内容をまとめた小見出しが付けてあるのは、読解の助けとして気が利いている。さらに、『日記』とはほぼ同時代の道中絵図（『五海道中細見記』）を掲載するとともに、江戸から丹波大山までの移動経路が一目で確認できる地図も巻末に付されていて、読解の参考になる。地名・和歌・寺社・人名に分類した語句索引が付いているのもありがたい。研究者らしい配慮である。このような行き届いた構成と編集の心配りがこの書の大きな価値と言えよう。

『研究』の問題にまとめられた『日記』の概要から、その要点を摘記しておく。

『日記』の記事の随所に和歌が挿入されており、その数は二百首以上になる。そのほとんどは道歌みちうた、すなわち仏教の心を詠んだ

歌で、多くは称瑞自身の作である。

ときに諧諷味かいぶくさえ感じさせるその歌風は伝統的な和歌とは趣を異にする。しかし、『古今集』や『後撰集』、『拾遺集』などの古歌を列挙した箇所もあれば、西行や芭蕉にも言及しており、称瑞が風雅の道に傾倒していたことをうかがわせる。

その一方で、説法が巧みであり、大勢の聴衆を満足させる優れた能力も兼ね備えた人物であったことが、その記事によって判明する。

全体の構成と記述ぶりから、その時々の記録の単なる集積ではなくて、意識的に仕組まれた作品であると言える。『研究』の著者はそれらのことを踏まえ、「整然とした構想と手法の裡に念仏礼賛への思いを色濃く滲ませながら、一方で折々にくだけた様相を呈しつつ気取らない旅の楽しみや風光に言及」していると、まとめている。妥当な概括と言えよう。

この『研究』によって『日記』の本文を通読するだけでも、称瑞と一緒に旅をしているような楽しさを覚えるが、私は三河部分（愛知県東部）の行程を実際に歩いてみた。それによって、称瑞の感懐を追体験するという面白さを味わわせていただいた。

さて、『日記』の文学作品としての価値についても一瞥しておきたい。

そもそも日本文学史上どのように位置づけられるべき作品なのであろうか。

まず、ジャンルとしては近世紀行文学に属する。近世すなわち

江戸時代というのは、我々が常識的に想像するよりはるかに旅行が盛んだった時代であり、その紀行文は膨大な数にのぼる。その分野の研究者、宗政五十緒氏によれば、江戸後期だけでも数千点にも及ぶという（新日本古典文学大系『東路記 己巳紀行 西遊記』岩波書店、一九九一、の解説）。

その中で、経路と旅行時期が『日記』に比較的近い作品は、香川景樹の『中空なまぢの日記』であろう。文政元年（二八一八）、江戸から伊勢へ旅したときの日記である。景樹は歌人だから、和歌が随所に挿入されており、その書きぶりも似ている。旅の翌年に刊行され、天保年間にも繰り返し再版されているので、同時代の称瑞はそれを読んでいた可能性があらう。

また、『日記』の和歌を俳諧に置き換え、同行の「扇童」という人物を曾良そうらになぞらえれば、『奥の細道』も念頭に浮かんでくる。文体も違えば、旅の事情も異なるけれども、芭蕉を敬愛していたはずの称瑞が紀行を記すにあたって、この有名な作品をまるで意識していなかったとは考えにくい。

いずれにせよ、これまで埋もれていたこのような紀行文学が、和歌に造詣の深い国文学者によって発掘され、研究書という形で光が当てられたことは幸いである。国文学界の慶事と言えよう。

以下、いかにも瑣末な蛇足と知りつつ、『研究』の翻刻と脚注に関して、気付いたことのいくつかと、愚考によって新たに判明したことなく、補説させていただく。

まず、翻刻について二点。

『研究』四二頁に「こ、の聖どもに送ります」とあるが、どうしてこだけ口語体なのかという疑問である。「ます」という丁寧語の助動詞が江戸時代から用いられていたことは、たとえば狂言のせりふにも出てくるので不思議ではないが、それはあくまで口語である。しかも、『日記』のほかのところでは用いられていない。

『研究』著者の中西氏にこの疑問を質したところ、

「送ります」を「送り、ます」と解釈できるか

というご回答をいただいた。つまり、「こ、の聖どもに送り、ます」何くれと語らひ行ま、に」と読む案である。なるほど名案である。文脈も文体も問題なくすつきり通る。その解釈以外に手はなからう。

次に、一一八頁「有がたく思へりしが」の部分。「く」が「く」で、「有がたく思へりしが」ならわかるが、踊り字（繰り返し記号）の「く」で「有がた」または「がた」をリフレインすると意味が通らない。『研究』の翻刻は正確だと思われるので、おそらく原文の誤写か書き損じであろう。

『研究』脚注の説明に関して気付いたことなど。

まず、四九頁の「もろこし人」。脚注には「朝鮮通信使のことをさすか。あるいは琉球の使節の江戸参府のことか」とあるが、長崎出島のオランダ商館長江戸参府の可能性もある。アメリカ人ハリスの妾「唐人お吉」の例があるように、江戸時代は欧米人も「唐人」とか「もろこし人」と呼ばれていたからである。

その見当で探ったところ、まさに称瑞が旅した天保十五年（一八四四）の二月二十八日にオランダ人が江戸城で將軍家慶に拝謁し貢物を献上している事実が見つかった。『徳川実紀』にその記録があり、『対外関係史総合年表』（吉川弘文館、一九九九）にも取り上げられている。称瑞が目撃したのは二月十四日の富士見坂（富士川近く）のあたり。江戸城登城の十四日前だから、日程的にぴったり符合する。

一方、朝鮮通信使の来日は江戸時代に十二回あったが、文化八年（一八一）が最後なので、その可能性はない。また、琉球の使節は「恩謝使」「慶賀使」と言って、琉球王の即位もしくは徳川幕府の將軍職就任に際して行なわれたが、天保十五年前後、双方とも代替わりがないので、その可能性はないと見てよい。称瑞が目撃したのは、オランダ商館長の一行だったと見てまちがいないだろう。

五四頁の「逢初川」は脚注で説明されているように熱海市を流れる川であって、『日記』に記されている該当地（静岡市清水区近辺）にはない。しかも、称瑞の経路は箱根山の北を通っていて熱海には寄っていないのだから、なおさら不審である。

『日記』では「いはら川」（庵原川）を無事に渡った直後にぶつかった川という叙述になっているので、それは巴川のことにはちがいない。一つだけ手がかりは、巴川下流域、ちょうど旧東海道の道筋にあたる場所に「愛染町」という地名があることである。『角川日本地名大辞典 静岡県』の説明によれば、昭和十四年以

降の町名のようなだが、「もとは大字辻の一部」とあるので、江戸時代に小字として用いられていた可能性がある。「あいそめ」と読むので、その地名から称瑞は川の名を誤って認識したのだろうか。あるいは愛染町付近では巴川のことを「愛染川」と呼ばれていた可能性もあろうか。

八〇頁に見える宝蔵寺のこと。愛知県岡崎市東部に現存する。『研究』脚注の示唆を受けて实地踏査したところ、その境内に「東照宮」があることに気付いた。それによって、『日記』の記述の、一つの疑問が氷解した。『日記』には次のように記されている。

馳て宝蔵寺の前に出づ。茶屋の原、中嶋などいふ所あり。  
(中略) 御開運、御身隠し山は八幡宮、東照宮のみやしるあり。

『研究』脚注には、その「東照宮」は「滝山東照宮。久能山、日光と並ぶ日本三大東照宮。」とある。つまり滝山寺境内にある東照宮を指しているという説明になっている。しかし、その「東照宮」を藤川宿に入る前の箇所で記しているのはいささか気になる。というのは、称瑞の経路は、宝蔵寺のあと藤川宿に入り、そのうち大樹寺経由で九品院を訪れ、それからやつと滝山東照宮に至るのだから、「東照宮」の記述箇所があまりに早すぎるのである。しかもその間、九品院に七日以上も滞在しているので、時間的にもかなり離れている。

ところが、実は、ほぼ称瑞の記述どおりの場所に、もう一つの

「東照宮」が存在したのである。「ほぼ」というのは、「宝蔵寺」に続けないで、「八幡宮」と並べて書いているからである。「八幡宮」というのは山中八幡宮のことに相違あるまい。

この神社は徳川家康が一向一揆のとき門徒衆に追われて逃げてきて、境内の洞窟に身を隠して難を逃れたという伝説のある所である。「御身隠し山は八幡宮」と称瑞が記したのは、その伝説を地元で聞いたからであろう。

その八幡宮と並べて「東照宮のみやしる」と記されているのだから、この「東照宮」は家康自身のことを意味するとも考えられる。つまり、くだんの一文は「家康の開運となった、御身を隠した山の山中八幡宮、すなわち家康公の御社がある」という意味に解釈することも不可能ではない。しかし、それならなぜ、直接「家康公」または「権現様」と書かなかつたのが疑問になるし、文体・文脈としても不自然である。「東照宮」というのは家康を祀った社のことであり、家康個人のことをそう呼ぶ例はないだろう。宝蔵寺に「東照宮」がある以上、それを指しているとするのが妥当かと思われる。

最後に、七一頁の「池田が宿、ゆやか石、ゆやか桜」について。脚注には取り上げられていない箇所だが、少し愚考を施しておく。

この「ゆや」というのは能「熊野<sup>ゆや</sup>」のシテ(主人公)熊野のことにちがいない。「くまの」ではなくて「ゆや」と読む。熊野は平宗盛の愛妾であり、遠江国池田宿(静岡県磐田市池田)の出身

である。郷里で病に臥せっている重篤の母から手紙が届いたので、熊野は帰郷させてほしいと宗盛に懇願し、清水参詣ののち許されるといふ内容の能である。この能を知っていれば、遠州池田という地名が強く印象付けられていて不思議ではない。この記述から、称瑞には能(謡曲)の知識があったと判断できる。

池田の行興寺(通称「熊野寺」)には熊野の墓があるので、「ゆやか石」というのはそのことであろう。問題は「ゆやか桜」。地元にあるのは、熊野が植えたという樹齢八〇〇年の藤であって桜ではない。能「熊野」は清水寺の花見の場面がメインなので桜は印象的であり、この能の象徴とも言える。その連想で称瑞は記したのであろう。

以上、愚考を施したが、あくまでそれは『研究』による学問的成果の学恩を受けてのことである。著者の中西氏に深甚の敬意を表し、感謝申し上げます。

(A5判上製箱入り、二〇二二年二月、六五〇〇円、風間書房)

(はやし・かずとし 名古屋女子大学教授)